漢法苞徳塾資料	№. 159
区分	報告
タイトル	**新パラダイムの為に**
著者	八木素萌
作成日	

◇「……脳の場合は、その構造機能に、まだ十分はっきりしない部分がありますから、これを物理法則を基にして完全に説明することは、今のところまだできません。……勿論ある仮定、想像をして、もっともらしい物理的説明を与えることは可能でしょうが。……しかし、……」(P 9)

「……余計うまいものを食べさせれば、身体が大きくなるというわけです。といって、いくら食べさせたからといって、無制限に大きくなるものでもない。これは原簿にコントロールのページがあるためでしょう。また同じに食べさせても、大きい人と小さい人とができるものです。これらはもともと原簿の違いによると思われます。」(P 15)

「……科学的に新しくある事実が解明されると、以前それに対して与えられていた説明が通用しなくなるのが通例です。例えば、伝染病が細菌によって起こることがわかりますと、前に色々に言われてきた原因が、少なくとも直接の原因としては通用しなくなる。戦争や飢饉などに匹敵する大きな災害であったペストやコレラが、こんな目にも見えない微小な生物によって生ずるというのは、まことにふがいない話である、と考えた人もあるでしょう。……今日では、ペストやコレラが細菌による病気であることを疑う人はありません。私などは最初から、それが当り前のように思われました。……」(P 25)

「……今から思えば、ビールス性肝炎に罹りまして、黄疸症状がいつまでも無くならなかった。カタル性黄疸、胆嚢炎、ワイル氏病、結核、癌、―しまいにはひそかに性病まで―当時既知の原因を片っぱしから調べられたのですが、どれも該当しないので、最後に開腹手術までやったのですが、それでもわからなかった。ずいぶん痛い、苦しい目に遇ったのですが、これが、一個の核酸と、数個の蛋白質からなる、生物か無生物かわからない、生物とすれば最も下等な奴の仕業であったかと思うと、少々情ない気がします。」(P 26)

「……癌の原因は今まだわからない。多くの想像がなされていますけれども、どれも確かなものはない。けれども、癌というものは、何か物質――生物か、無生物かわかりませんが――によって起こるということは、誰も信じているでしょう。これが、気が短いから、他人に不親切だからというような、倫理的原因によって起ると思う人は少ないでしょう。そうすれば、これに対する対策も、自ら限定されることになります。」(P 26)

「一度細菌によることが明らかになった上は、昔の「傷寒論」に戻ることは不可能です。一度科学的知識が確立された上は、これを否定して人間観、世界観を作ることはむずかしくなります。……」(P 27)

以上～～山内恭彦：『現代科学と人間』より

☆中公新書『現代科学と人間』：山内恭彦；編

山内恭彦、渡辺格、高山英華、高木純一、の執筆。

山内恭彦＝1902 年生まれ、東京大学名誉教授、理論物理学者。

◇「同じ型の同じ年式の、同じ時にラインアウトして工場から出た自動車にも、個性がある」と言われる。全ての部品は同一の規格によっているのに、何故「個性がある」ことになるのであろうか？
極めて多数の部品を組み立てて製造された、高度な機械のように、生命もまた、自動車の部品が鉄を主にした金属などで出来ている代わりに、蛋白質の多様な部品によって構成されて極めて高度な機能を持ったものである。このように把握したものを「人間機械論」と言う。

多数の複雑で多様な部品によって構築され構成された高度な機能のもの、しかも、部品の規格は厳格に統一されているもの、これが自動車であれば、そこに見られる「個性」は無視して良いであろうか？